

—総 説—

岡西為人：新修本草の構成

Tameto OKANISHI : On the Constitution of Hsin-hsiu-pên-ts'ao.

(Division of Pharmacognosy, Shionogi Research Laboratory)*

古来中国で著作された本草の種類は夥しい数に上るが、それらの中で各時代を通じて中国薬学の基幹となったのは「神農本草」を祖述した次の一連の諸書である。

神農本草經集注→新修本草→開宝本草→嘉祐本草→証類本草（經史証類備急本草→大観本草→政和本草）

これらの本草は何れも1つ前の本草に新法と新薬とを加えただけで、新しい本草の中には古い本草もほとんど元のままの形で保存されていた。従って新本草の出現と同時に旧本草の存在価値は消滅するわけで、嘉祐以前の諸本草が早く亡んだ理由もここにあったと思われる。しかし如何に古態の保存に留意されたとしても、伝写や校刊の度毎に多少の変化が生ずるのは余儀ないところで、そのような変化が累積されて証類本草では新修本草以前の古本草の俤は著しくゆがめられたものとなっている¹⁾。

漢薬のように古い伝統をもつものの研究には古い本草の記録が重視されるのは当然であるが、それが証類本草ではゆがめられているとすると、正しい古本草の再現が要望されるのも自然の勢である。明末の盧復以下多くの人々によって神農本草の復原が試みられた²⁾のもそのような要望のあらわれと見られるが、宋以前の本草編成の態度が叙上の通りであるから、古い本草の復原に当っては、証類本草から逆に1つずつ古いものへと復原して行くのが順序である。明清の学者はこの手数を省いたが、江戸の学者たちは綿密にこの順序をたどった。即ち天保の頃小島宝素が新修本草の欠巻を補って全20巻を完備したことに始まり³⁾、次で森立之らの集注本草⁴⁾となり、これらの礎地の上に立って最後に完成したのが森立之の神農本草經である。宝素が最初に新修本草を取上げたのは、当時彼らの努力によって発見・謄録された仁和寺本その他の古写本の出現⁵⁾が直接の動機となったものと思われるが、開宝本草はそのまま証類本草の中にその姿を留めている⁶⁾から、わざわざ復原するまでもなく、新修本草が最初の問題として取上げられたのは極めて妥当であると思われる。

宝素が復原したのは10巻であったが、その内現在残っているのは養喜廬叢書中に収められている巻三の1巻だけで、他の9巻は残っていない。その後中尾博士も新修本草の復原を宿願とされた⁷⁾が、果さずして終られた。近年范行準氏は養喜廬本にもとずいて重輯新修本草を作った⁸⁾がこれは未見である。私は先年研究上の必要から欠巻の部分の復原すると共に、仁和寺本や養喜廬本の誤脱を訂正して全20巻を輯成し、その際復原に関する調査によって知り得た事実を纏めて「新修本草の考察」と題して、復原本と共に印刷に付した。それらの1部は既に刷り上っていたが、終戦の騒乱に遭って版は烏有に販し、原稿だけが辛うじて難を免れた。以下述べる所は当時の稿本の1部——新修本草の巻数並びに薬品数に関する部分で、復原本輯成の基礎となったものである。

1. 巻 数

新修本草の巻数については証類本草に引かれた孔志約の序には「54巻」とあるが、李勣の進表並びに其序、蜀本草序などには「53巻」となっていたとのことである⁹⁾。54巻の内訳は

新修本草	20巻
同目録	1巻
薬図	25巻
同目録	1巻
図経	7巻

で、53巻というのは右の内から薬図目録1巻を除いた数である。これについて中尾博士は「李勣が進本の時には薬図の目録は無く後に不便なるためこの1巻を増加したものであろう」と推定されている。

ところで新唐書芸文志には48巻本と57巻本との2種の本草が著録されている。これは恐らく重複で、前者は薬図を20巻としたために5巻減じ、後者は54巻に本草音3巻が加わった数である。この新唐志には病源候論も重載されており、また上の2種の本草の中間に記載されている「孔志約本草音義二十巻」なるものは他書に見られないもので、新

* 192 Imafuku, Amagasaki, Hyogo.

唐志の記事が信憑し難いことは多紀氏の医籍考にも指摘せられており、本草音三巻についても疑問がもたれるところである。但し医籍考には唐志に見ゆる2つの本草の内、48巻本を「張鼎本草」とされているが、これは明らかに医籍考の誤で、他の例によって推せば、この「張鼎」は上の「沖和子玉房秘訣」の注であって本草の注ではない。

薬図と図経とは弘景の集注本草には無く、新修本草から始まったものであるが、その主体は無論新修本草20巻で、その20巻の内訳については証類本草の序例に引かれている唐本注に

今以序為一卷，例為一卷，玉石三品為三卷，草三品為六卷，木三品為三卷，禽獸為一卷，虫獸為一卷，果為一卷，菜為一卷，米穀為一卷，有名未用一卷，合二十卷

とあるによって明らかである。大観本草は本文だけで31巻であるが菜部と穀部の先後が逆になっている点を除けば、これと全く同じ順序であり、また仁和寺本や養喜廬本の分け方もこれと一致しているから、この点については問題はない。

2. 薬品数

新修本草所載の薬品総数は850種であるが、その内訳は唐注に記する所と嘉祐本草に記する所との間に相違がある。相違の原因は未だつきとめ得ないから¹⁰⁾、復原本では嘉祐本草に従うこととした。それを部、品別に纏めると第1表となる。

第 1 表

巻	部	品	本 經 品	別 録 品	新 附 品	計
3	玉石	上	18	3	1	22
4	玉石	中	16	6	8	30
5	玉石	下	12	9	10	31
6	草	上上	38	2	—	40
7	草	上下	34	2	2	38
8	草	中上	32	4	1	37
9	草	中下	14	13	12	39
10	草	下上	31	4	—	35
11	草	下下	18	24	25	67
12	木	上	20	6	1	27
13	木	中	17	2	9	28
14	木	下	17	7	21	45
15	獸禽	三品	21	26	9	56
16	虫魚	三品	47	19	6	72
17	果	三品	8	15	2	25
18	菜	三品	12	18	7	37
19	米穀	三品	6	22	—	28
20	有名未用		6	187	—	193
計			367	369	114	850

上表の本経品及び別録品の数は陶弘景の序に「今輒苞綜諸經，研括煩省，以神農本經三品合三百六十五為主，又進名医副品亦三百六十五，合七百三十種」とあるのに合致しないが、これは弘景以後における改易によるもので、この点については別に考察する¹¹⁾。

次に新修本草20巻の内、巻1及び巻2の序例を除いた18巻の各論における各巻の薬品数並びにその順序は、仁和寺本、養喜廬本、千金翼方、本草和名、医心方、大観本草などを参考として定めたのであるが、これら諸書の間には若干の相違があり、各書の薬品数を復原本のそれと一括表示すれば第2表の通りである。

この表は薬品の異同を問わず、ただ数だけを挙げたのであるが、それでもなお各書の間かなりの出入があることは表に見られる通りである。表中「新定」とあるのは今回諸本を参考として定めたもので、ほぼ頭慶の旧に復し得たと信ずるものであるが、次に「新定」の根拠を明らかにするために、各巻における諸本の異同を弁じ、その譌誤を訂正しておく。

第 2 表

卷	部	品	会 本	纂 本	翼 方	和 名	医 心	大 観	新 定
3	玉石	上		22	22	26	26	22	22
4	玉石	中	30	30	29	29	30	30	30
5	玉石	下	31	31	31	31	31	33	31
6	草	上上	—	—	40	40	40	40	40
7	草	上下	—	—	38	38	38	38	38
8	草	中上	—	—	37	37	37	37	37
9	草	中下	—	—	39	39	39	39	39
10	草	下上	—	—	35	36	35	34	35
11	草	下下	—	—	68	67	67	60	67
12	木	上	27	27	27	26	27	26	27
13	木	中	—	29	29	30	28	31	28
14	木	下	—	45	45	43	45	46	45
15	獸禽	三品	56	56	56	72	56	60	56
16	虫魚	三品	—	—	71	113	73	68	72
17	果	三品	25	25	25	45	25	26	25
18	菜	三品	—	—	37	62	38	38	37
19	米穀	三品	28	28	28	36	28	28	28
20	有名未用		—	193	197	193	193	194	193
計					854	963	856	850	850

卷三 玉石部上品, 22種 (翼方)¹²⁾

〔会本〕 缺

〔和名〕 「玉石上廿一種」とす。「廿二種」の誤。但し五色石脂を分条し、実数は26条。

〔医心〕 五色石脂を分条し、実数は26条。

〔大観〕 薬品の次序全く異なる。以下19巻まで皆同じ。

卷四 玉石部中品, 30種 (会本, 医心)

〔翼方〕 紫銕騏驎竭を玉石下品に移し計29種。

〔和名〕 「玉石中卅種」と標するも生鉄を逸し実数は29種。

〔大観〕 紫銕騏驎竭を木部中品に移し、食塩を米部下品より移す。計30種。

卷五 玉石部下品, 31種 (会本, 和名, 医心)

〔会本〕〔纂本〕 目録に「十種名医別録, 九種新附」とあるが、本文中「新附」と注記されたもの10種あり、新定の31種を大観本草に従って分けると、本經品12種、別録品9種、新附品10種となる。

〔翼方〕 胡桐涙を草部下下に、紫銕騏驎竭を玉石中品より移す。計31種。

〔大観〕 胡桐涙を木部中品に、半天河及び地漿を草部下下より、蛇黄を虫魚下品より移す。計33種。

卷六 草部上品之上, 40種 (翼方, 和名, 医心)

〔会本〕〔纂本〕 缺 (巻6—巻11)

〔和名〕 「草上四十一種」とあるが、実数は40種。

〔医心〕 「草上之上四十一種」とあるが、実数は40種。

卷七 草部上品之中, 38種 (翼方, 和名, 医心)

卷八 草部中品之上, 37種 (翼方, 和名, 医心)

卷九 草部中品之下, 39種 (翼方, 和名, 医心)

〔会本〕〔纂本〕 以上3巻共に缺

卷十 草部下品之上, 35種 (翼方, 医心)

〔会本〕〔纂本〕 缺

文蛤と魁蛤との順序が逆。

〔医心〕 「七十二種」とあるが蟹の次に擁劍を増し、実数は73種。

〔大観〕 中品の伏翼と天鼠尿とを禽部中品に、下品の蛇黄を玉石下品に移し、彼子を有名未用に移す。計68種。
中品の水蛭を下品とし、下品の蝸牛を中品とす。

目次の蝦及び烏蛇の2条に注記を缺くため別録品のように見えるが、前者は「新附」、後者は「今附」の注記を脱したのである。

目次に「一十一種名医別録」とあるのは「一十種」の誤。

卷十七 果部, 25種 (会本, 医心)

〔会本〕 目次の梨と奈とが連書され一物と誤られる。

〔翼方〕 3品を分たず。和名及び医心も同じ。

〔和名〕 「菓四十五<sup>本草廿五
食經廿</sup>」とあり、大棗の次に生棗を増し、安石榴の次に枸櫞その他19種を増す。

〔大観〕 木部上品の橘柚を上品中に移す。計26種。

卷十八 菜部, 37種 (翼方)

〔会本〕〔發本〕 缺

〔翼方〕 本文韭の条に白蘘荷を附載す。

〔和名〕 「菜六十二<sup>本草廿八
食經廿四</sup>」とあり、冬葵子の次に葵根を別出し、瓜帯の次に越瓜、胡瓜、熟瓜の3条を増し、後に茄子その他21種を加う。菜菔と竜葵との順序が逆。

〔医心〕 冬葵子の次に葵根を別出す。計38種。

〔大観〕 米穀部を先、菜部を後とす。草部下品の雞腸草を菜部下品に移す。

卷十九 米穀部, 28種 (会本, 翼方, 医心)

〔和名〕 「米穀三十五種<sup>本草廿八
食經七</sup>」とあるが、大豆黄卷の次に生大豆を別出し、最後に白角豆その他7種を加え実数は36種、その内本草品は29種。

〔大観〕 下品の食塩を玉石中品に移し、草部下品の春杵頭細糠を米穀部中品とす。計28種。

下品の藟豆、黍米、粳米の3条を中品とし、中品の陳米を下品とす。

目次の灰藿に「新補」の注記を脱す。「二種名医別録」とあるのは「一種」の誤。

卷二十 有名無用, 193種 (新定)

〔会本〕 缺

〔發本〕 目次に紫石華（または白石華）、石芸、石劇、路石、曠石、敗石、吳唐草、封華の8条を脱す。本文は193種。

〔翼方〕 類を分たず。

目次の首に「有名未用一百九十六味」とあるが、目次に書かれているのは新定の193種に北苻華、領灰の2者を加えて計195条、本文には更に根莖中湯、兎蔓草の2条を冗出し計197条となっている。根莖中湯は薑実の附条であろう。

〔和名〕 各品間の区分が明瞭を欠き、他本を参照しなければ判じ難い。

〔医心〕 「第二十卷有名無用藥百九十三種和名無」とあるだけで品名の列挙は省略せられている。

〔大観〕 「有名未用総一百九十四種」とある。これは開宝本草で虫部下品から彼子をここに移したため1種増加したのである。

塩野義製薬株式会社研究所

註

- 1) 森立之の「重輯神農本草經序」に「余嘗窃欲復古本草之舊，仍取証類本草讀之，始知綱目之杜撰妄改不足拋矣，再校以新修本草，而又知証類之己經宋人刪改不足信也，更以真本千金方及皇国医心方，太平御覽所引校之，而知蘇敬時校改，亦復不少也」とある。
- 2) 明の盧復（神農本草經），清の孫星衍及孫馮翼（神農本草經），顧觀光（神農本草經），黃奭（神農本草經），王闓運（重校神農本草），姜国伊（神農本草），日本の森立之（神農本草經）などがある。詳細は拙著「宋以前医籍考」を参照されたい。
- 3) 宝素堂蔵書目録に「新修本草二十卷，第一，第二，第三，第六，第七，第八，第九，第十，第十一，第十六，家大人足傳蔵原卷，凡二十卷」とある。
- 4) 森立之らが復原した稿本は2通あり，1は初稿本で上野図書館に珍藏され，2は羅振玉氏旧蔵の第2次稿本で，

羅氏は敦煌本本草集注序録跋（雪堂校刊群書叙録，卷下）の中で「予十余年前，得日本医家森約之校輯本草集注七卷手稿本，拋新修本草等書，校勘至密，塗己狼籍，久欲為之写定付梓，今又得隱居原書，於此書殆有夙縁，爰先以此卷影印流伝，森氏所輯，期異日成之」と叙べられており，刊行の意図を抱かれていたようである。この稿本は私が現蔵している。

- 5) 新修本草の古鈔残巻が発見された事情については中尾博士の「唐新修本草之解説」中に詳述されており，その後京都大学森鹿三教授によって詳考せられている。（東方学報，京都，第11冊）
- 6) 証類本草では各巻内の薬品の順序が嘉祐本草とは著しく変っている。恐らく嘉祐の文と図經の図とを合併したため，印刷の都合によって順序を変更したものと思われる。
- 7) 「唐新修本草之解説」の中で「余は別に新修本草の記文にして他の本草医書に存するものを集め其校訂を志しているが，未だ之を完了し得ずして，夫れを茲に併録し武田翁が此本を刊行される趣旨に添い能わぬことを遺憾とする」とのべられている。
- 8) 「影印医籍考」の范行準氏跋に「新修本草，唐蘇敬等奉勅撰也，多紀氏云『佚』而彼邦実尙存唐卷子本十一卷，且亦曾經丰修堂所蔵者，光緒十五年，徳清傳雲竜，在日本雇工景刊其書，入娑喜廬叢書，余之重輯新修本草，即拋是本而以他書補成之」とある。
- 9) 唐本序（大観本草）の「撰本草并図經目錄等凡成五十四巻」の句に対する掌禹錫の注に「謹按蜀本草序作五十三巻，及唐英公進本草表云，勒成本草二十巻，目錄一卷，藥図二十五巻，図經七巻，凡五十三巻，又英公序云，撰本草并図經目錄等凡成五十三巻，拋此三者合作五十三巻，又拋李含光本草音義云，正經二十巻，目錄一卷，又別立図二十五巻，目錄一卷，図經七巻，凡五十四巻，二説不同，今並註之」とある。
- 10) 拙著，「新修本草及び証類本草の薬品数」，塩野義研究所年報，第4号，465，（1954）
- 11) 神農本經所載の薬品数については森鹿三教授の詳細な考察がある。（京都大学人文科学研究所 創立廿五周年記念論文集，658～673頁，（1954）
- 12) カッコ（ ）内の書名は当該巻編成の典拠を示す。
書名の略号は次の通りである。
会本—本草図書刊行会本新修本草
娑本—娑喜廬叢書本新修本草
翼方—千金翼方（影元大徳刊本）
大観—大観本草（柯氏影印本）
和名—本草和名（日本古典全集本）
医心—医心方（万延元年刊本）